令和６年度　第４回横須賀市学力向上推進委員会　議事録

１　日時　令和７年２月 19 日（水）15 時 00 分から 16 時 30 分まで

２　場所　横須賀市役所　正庁

３　出席委員
笠原委員・石井委員・新田委員・塚田委員・庭田委員・髙橋委員・村上委員

４　事務局
学校教育部教育指導課　　石橋主査指導主事　渡辺主査指導主事
黒澤指導主事　北井指導主事　東指導主事

５　傍聴者　なし

６　会議内容

（１）協議
①今年度の学力向上に向けた取組のまとめの内容について
②家庭学習啓発リーフレットの刷新内容について

という上記二点について協議を行った。

■委員長

本日が今年度最後の委員会になる。時間が限られているので協議に移る。最初に、事務局から資料について、作成の意図を踏まえながら説明をお願いしたい。

■事務局

資料１と資料２について説明する。資料１については、当初、事務局で考えていたのは、授業改善を図ろうとしている教員が読んだときに、心に残るような資料を作りたいと考えていた。多少文量が多くても、授業改善に興味をもつ

教員は増えていると感じているからである。しかし、実際に作成してみると、文量が非常に多くなり、多くの教員が目を通したときに読んでもらえないという懸念があった。そのため、多くの教員に読んでもらえるように、シンプルな形に変更し、現在の形になっている。

内容は、学力が向上した成果を示しながら、なぜそのような成果が上がっているのかを説明するために、市内で指導主事が見てきた授業や学校の様子を取り入れ、具体例を載せながら記述することを考えて作成した。ただし、この資料は本当にたたき台であり、多くのご意見をいただいて、内容をまだまだ変えていきたいと考えている。

続いて資料２について説明する。このリーフレットは前回の協議の中で、さまざまなご意見をいただいた。その中で、家庭と学びを共有する視点において、これまでのリーフレットでは家庭に負担を感じさせ、目にしても読んでもらえないのではないかという意見があった。そのため、作り変えていく方針とし、事前送付した資料のように作成した。しかし、昨日、笠原委員長とオンラインで打ち合わせを行い、新たな視点が必要であると考えて、改めて作成している。事前に送付はしていないが、机上に最新の資料を配布した。その資料には追加の絵が入っている。この資料も笠原委員長との打ち合わせを基に作り直したものである。

このように、我々の作業は、まさに作っては壊すことの連続である。本日も提示した資料に対して、多くのご意見をいただき、それを反映しながら、教員が目にした際により良いものになるようにしたいと考えている。ぜひ、できるだけたくさんのご意見をいただきたい。

■委員長

実際には皆さんからご意見をいただきつつ、協議を進めながら質問やご意見を伺いたいと考えている。早速、協議事項に移る。協議事項は２点ある。今年度の学力向上に向けた取り組みのまとめを内容とする冊子と、リーフレットの内容の検討である。各委員から意見をいただき、この学力向上推進委員会が横須賀市の教員に何を期待するのか、そのためにどのような形にすべきかについて、率直な意見を求めたい。まずは、学力推進プランの実施における報告書に

ついて率直な感想や意見、どのように変えるべきかという意見をいただきたい。

事務局の説明に付け加えておくが、事務局に配布する資料をシンプルにしてほしいということは、私が指示をした。その理由は、教員の手元には大量の資料があり、机の上にも本当にたくさんの資料があるためだ。しかし、教員にとって重要で必要なものは、自分の手や目の届く場所に必ず置いていると思う。

今回の資料１の最初のページの右側にある教科等指導員の公開授業の参加者の推移については、令和４年度から令和６年度にかけて大きく伸びている。この背景には、多くの教員が実際の授業を見たい、その中でどのような取組をしているのか知りたいという強い思いがあることがわかる。そうしたときに、この資料の構成をどうするべきかが重要だ。

提示された資料にはいろいろなデータがあり、その前に文章が書いてある。しかし、文章が長すぎると思う。教員がこれを読むには時間がかかる。伝えたいことをどのように示すのが一番良いのかを考える必要がある。

資料全体をどう示すのか、報告書の作りをどのようにしたら自分の学校の教員が手に取り、目にし、印象に残るのか。若い教員や保護者が見ようとする視点で意見をいただきたいと考えている。

■石井委員

この資料には学力向上推進プランが令和４年から４年間続く計画であることが書かれている。しかし、昨年や一昨年はどうだったのかがわからない。教員にこれを渡すつもりということだが、新しく教員になった方もこれを見ると思う。そこで、令和４年から１年間、令和５年からの１年間で何をしてきて今に至ったのかがわからないという問題がある。 もちろん、そこまで詳細を入れると資料がわかりづらくなるかもしれないが、プランが今の状態に至るまでにどのような経緯があったのか、あるいは、これが目指す完成形なのかを伝えるべきかもしれない。その辺りが少しわかりにくいため、令和４年から４年間の計画がどのようにつながってきたのかが、ぱっと見では理解しにくいと考える。この中にすべてが含まれていると言われればそれまでだが、それが見たと

きに伝わりづらいと感じた。

■委員長

私たち教員や教育行政職がやってしまいがちなのは、知っているだろうという思い込みから資料作成が始めてしまっていることだろう。しかし、初めて見る人たちにとっては、「へぇ、こうなっているのか、今までどうだったのだろう。」といった石井委員のような意見が自然だと思う。

事務局に１つ確認したい。事務局としては、完成形を伝えたいのか、それともプロセスを含めて伝えたいのか、どちらを優先したいのか。プロセスを入れた方が良いという意見に皆さんが賛同する場合、事務局としてはどう考えているのか。これを作成した際には、そこまで考えていたのか。

今回示されている資料には、令和４年度から令和６年度までのプロセスについての記述がない。それは、前の報告書を参照すればわかるという考えなのか。あくまでも今年度の成果のみをここで示したいのか。石井委員が言うには、今年度の成果を理解するためにもプロセスが書いてあるとわかりやすい、ということだ。学力向上推進プランの目標を実現に向けた取り組みについて、例えば令和４年に何をしたのか、５年にどのようなことをしたのかを書くべきだと提案している。

■事務局

どちらかというと、プロセスを伝えていきたい。来年は学力向上推進プランの４年目になるため、現在は３年目であり、令和４年、５年、６年というこの３年間で、教員の授業力や授業に対する意識が変わってきた様子を伝えていきたいと思う。令和４年にどのようなことを行ったか、５年にどのようなことを行ったかを細かく載せることもできるかと考えたが、表形式にして簡単に答えていくことが良いと考える。

■委員長

もちろん、今、決定してくださいと言っているわけではない。石井委員の意見に対して、事務局がどのように捉えているかをお聞きしたかった。他の方で

意見はあるか。

■髙橋委員

この報告書が誰に向けた相手意識と目的意識を持っているのかを、もう一度確認する必要があると考える。この学力向上推進委員会は、行政として適正な予算が付き、代表者が集まって議論してきたものである。さらに、学力調査というツールを用いて、かなりの費用をかけて実施しているので、行政文書として報告書とするならば、この薄さでは十分ではないと思う。もっと成果を明示する必要があるだろう。

しかし、そのように作成した資料を教員が見るかというと、そうとは限らない。文科省の諮問や様々な通達も同様で、文量は多いが、そのような時は、概要などがワンペーパーで示されることがある。そのようにするならば、資料に込めた教員へのメッセージとして、Ａ４サイズ１枚でもよい。あるいは保護者向けに横須賀市の取組や現状をワンペーパーにするなら、異なる言葉遣いになるだろう。

この報告書から何を読み取り、喜んでもらい、教員に次に何を頑張って欲しいのかを伝えるワンペーパーの形もあるだろう。来年度の授業では、ぜひこうしたことをやってみてください、先生たちの努力が今の結果につながっていますよと、それらが伝わるようにし、詳細は行政のホームページで確認してください、という形で示すのもよい。

文量の多い報告書は、学校に一部配れば十分である。教員には、明日の授業に直結するメッセージを発信することが重要だ。それは報告書作成の際の分析から得たものであれば良い。また、保護者についても、次の話と重なるかもしれないが、学力を全体的に向上させるには、保護者の協力が欠かせない。学校だけでは限界があるということだ。学力を向上させるためには、メッセージを概要版のような形でまとめ、発信する必要がある。

行政文書としての報告書は、それに見合ったものを作るべきであり、メッセージであるならは簡潔で良い。教員はさまざまな書類に囲まれているので、ワンペーパーで、言葉をシンプルにし、教員に取り組んでほしいことや、感謝の

意を伝えたいことをまとめると良いと考えた。

■委員長

事務局に確認したい。この資料は『報告書』という言葉がタイトルに入っているが、報告書という言葉を使わなくても問題はないか。

■事務局

問題ない。

■委員長

では、何をねらって作成した資料か、説明していただきたい。

■事務局

先ほど髙橋委員がおっしゃったように、我々は教員へのメッセージを送るという意識で資料を作成した。各教員が少しでも高いモチベーションをもち、こういう授業をやりたいとか、こういう学校を作っていきたいと考えていただきたいメッセージを込めている。

実は、そのような授業に直結する内容が資料の前半部分に本来はあった。それは各教員がこれを読んで「新しい授業を作ってみたい」「こんな授業をやってみたい」「こんな家庭学習の取組は面白そうだな」と思えるような読み物のような作りだった。そういったことも含め、報告書というよりは教員へのメッセージという意味合いを強く持って作成していたが、文量が多いものは、教員に読んでもらえないという危惧があったことから前半部分の読み物はカットした。

■庭田委員

日々学級業務を行っている教員に見ていただく資料として考えると、やはりパッと見てわかるものがよい。まず、グラフが目に入ってくる。だから、グラフと同じくらいの感覚で、言葉も目に入ってほしい。そのため、文章よりも箇

条書きの方が見やすいと思う。

例えば、目標２や３に対して成果が出ている。この成果の要因を分析していただいているので、成果や要因を箇条書きで書く程度でよい。また、課題も伝えるべきだ。例えば、目標２の場合、国語では無回答率が減少しているが、算数や数学では無回答率が改善していないという課題がある。この部分が少しわかりづらいところがあるため、課題も含めて伝えたい。

今、自分がこの資料でポイントだと思うのは、「どの授業でも日常的に自分の考えを書いて表現する」とか、「職員全員が意識して学校全体で指導する」「課題に対して繰り返し挑戦する」といったことを箇条書きで示すことだ。これにより、日常において教員が意識しやすくなると考える。また、書かれていることは初めて聞くわけではなく、経験１年目や２年目の教員でも、初任者研修等で指導のポイントとして確認されてきたものだ。そしてそれが実際のデータをもとにして成果を出していることを改めて確認するメッセージになる。だからこそ「先生たちも頑張りましょう」というメッセージになる。

それに加えて、教育委員会としては、資料の冒頭に「教科等指導員の公開授業の参加者が増えました」というデータも示しており、多くの教員が参観に来てくれたことを伝えることができる。このようにデータを資料に示せば、伝えたいメッセージがより多くの人に伝わると考える。

■塚田委員

庭田委員の発言と重なる部分があるかもしれないが、まず、各学校が非常に努力していることを評価していただいているため、学校のモチベーションが上がると思う。ただ、私たちは来年何をしたら良いのかというメッセージがもっと具体的に書かれていると、教員を対象として作られる場合には、より直接的に伝わると思う。

例えば、管理職や学力向上担当者に向けたものであれば、今の状況がわかる参考になる資料にはなったとは思うが、髙橋委員が述べたように、相手意識と目的意識に基づき、誰にどういうメッセージを伝えるのかを考慮し、もっとメッセージ性を持たせても良いのではないかと感じた。

■新田委員

この資料を教員が自分のこととして捉えるのは難しいと感じた。教員が自分のこととして意識するのが難しいのはおわかりだと思う。それゆえに、この資料を読まないのではないかと考えている。体裁を変えたとしても、教員が自分のこととして捉えない限り、資料を読まない。しかし、その問題をどう解決するかはまだはっきりとした答えがないが、漠然と答えが見え始めている。 例えば、文字を大きくするとか、記事を大きくして端的にイラストを入れるとか、大きな文字で箇条書きにするといった単純なことをするだけでも、ぱっと見てわかりやすくなるのではないかと思う。また、３ページのグラフには特色があるものの、下がっている部分がうまく読み取れないと感じた。せっかく作成した資料なので、なるべく図式化や箇条書きにして見やすくしたいと考える。

■村上委員

自分は文字を読むのが苦手なので、ぱっと見たときに結論がすぐわかるようにしてほしいと思う。目標があって、グラフがあって、解説文があってという対応関係を探すのに時間がかかる。もし教員向けとして配布するのであれば、グラフに矢印を書いて「ここがこの成果を表しています」「これは増加しています」といった説明が付いているとよい。

学力向上推進プランの目標においても、因果関係や手段と結果の関係がグラフ中心に目につくように書かれていると、自分にも理解しやすいと思う。また最初に載せてある公開授業参加者の推移というのは、非常にインパクトのある肯定的なグラフなので、最初に持ってきたいと思うだろう。しかし、これを最後のメッセージとして持ってきても良いと感じる。

例えば、最初に取り組んできた手立てがあって、その後で目標１から３に対する結果のグラフがあり、最後に「教科等指導員の公開授業の参加者が年々増加しています。教員の授業改善意識が高まっている中で、これからさらに意識を続けてください」といったメッセージを載せると、自分たちの努力が肯定的に捉えられていると伝わるのではないかと思う。

■委員長

教員がこの資料を自分のことにできるかというのは、本当にハードルが高いと感じている。市教委としては、行政の役割として学力向上推進委員会を立ち上げ、横須賀市の子どもたちの学力の現状や学習状況調査の結果から具体的な取組を示しているが、その取組を学校としてどのように受け止め、自分のことにするかまで市教委は考えいくことが必要である。

市教委の方針は、横須賀市の教育委員会と学校が同じ方向を向いて学力向上に取り組むというものであった。そういった方向で、メッセージを伝えることを目的にし、委員長に就任した。それは変わっていない。現在の資料は片方の視点しかなく、学校がどう受け止めるかをセットで考える必要があるだろう。

どれ程良い資料でも、受け止める側が個人に丸投げしてしまっては、伝わらない。４月の職員会議で、全ての学校が管理職や学力向上担当者を通じて説明し、全教員と共有するような資料としたり、別の委員会や担当者会でも同じことを述べたり、職員会議の時間を使って再度話したりするような取組が必要である。資料作成と伝え方をセットで考えていかなければ、学校には浸透しにくいのである。そのため、この場で話題となっているように、行政としての報告書ではなく、全ての教員に向けた教育委員会のメッセージを出すということが考えられるだろう。その次のステップとして、市教委と校長会がしっかりと連携し、確認して取り組んでいくというストーリーを描くべきだろう。

次に、庭田委員から話があったように、こうした結果はエビデンスであり、そのエビデンスが裏付けとなる。取組から得られた成果があるので、どういう成果があったのかを示す必要がある。エビデンスが存在し、取り組んでいるが、まだ課題がある。これらを一つのセットとして示すことが重要だ。できるだけわかりやすく、図や箇条書きで示すべきだと考える。

このあたりが、今の議論の中から整理されたこの資料の改善に対するポイントである。

■新田委員

現在、自分の学校では各教員にどのような授業をしたいかを尋ねている。学習指導要領で決まっていることだが、教員自身が窓を開けて外の世界を見ない限り、進化の速い社会やAIの進展の中で生きる子どもたちにどのような力をつけるべきかを考えるのは難しい。教員は学校の中で安穏としているかもしれないが、黙っていれば生徒指導が入ってくる。それに何か違和感を覚える。

その窓を開けるためにはどのような授業をすればよいのか、どのような力を身につけさせるべきかを、みんなで話し合うことが大切である。今はさまざまな話をして、学校の教育目標を変えることを検討している。現在は1人1台の端末があるので、それを使って「先生たちはどのような授業をしたいですか」と尋ねている。「これをしなければならないからやりなさい」と言うことも大事だが、「皆さんはどう考えますか」と対話することが大切である。

話し合う中で、最終的に目指す方向性が一致することを確認しなければ、内に閉じこもった学校からは外の世界を見えずに終わってしまう。自分でサイコロを振るくらいの積極性を持ってほしいが、今は他人に振られたサイコロで進んでいるように感じる。

どうしようもないこともあるが、教員の主体性に火をつける方法を考えなければ、指導主事が苦労することになる。やらなければならないことに向けて努力しているのは指導主事だけになってしまう。

もう1つは、委員長が校長会について言及されたが、教頭会や校長会も含めて、授業づくりは後回しになっている。学校の問題をどうするかが多く話されて、授業づくりをどう進めるかが優先されていない。例として、中学校では教材研究が最後の時間に行われている。研究授業があると、忙しいためやりたくないということも言われてしまう。そうした状況を含めて、学校全体のマネジメントや部活の地域移行も考えながら、学力向上の問題に取り組む必要がある。教員の意識を向けるために、何らかの仕掛けを別に考え、一緒に取り組もうという気持ちを醸成することが大切だと感じている。

■委員長

授業づくりを含めた課題をどう扱っているかは、学校によっても違う。校種

によっても異なる。実状は様々で、この議論の場で、各学校のケースを管理職や総括教諭の立場から発表していただいている。すべてが同じ方向で進むとは思わないが、少なくともこの委員会に与えられた課題は、横須賀市の子どもたちの学力向上である。ただし、学力向上とは単に学力・学習状況調査の点数を上げることや、平均点を上げることではないと繰り返し言ってきた。

その背景には横須賀の地域が抱える非常に大きな課題がある。それらを含めて、子どもたちの学力を向上させる議論と同時に、教員の働き方を見直す必要がある。余分なことをしないと言うが、では何が余分なのか。学校教育の最も重要な命題は、子どもたちに資質・能力を身に付けさせ、小中学校を卒業させることであり、これが９年間の学校教育の重要なミッションである。

新田委員が言及したように、社会に対して窓を開けることができない教員もいる。もし全員が窓を開けられたのであれば、こういった会議は不要だろう。しかし、窓を開けられない教員もおり、開けている教員も真に意識して行動しているとは限らない。したがって、各校の教員と共有すべき内容を考え、この年度末に、学力向上推進委員会として学力・学習状況調査の結果や学校訪問から見えてきた事実や結果、そしてプロセスを報告することが必要だろう。また、この報告がそのまま学校に伝わり、学力向上につながるわけではない。この資料には、学級経営の問題や地域、家庭との連携などが含まれており、それぞれの学校によって読み解き方がある。この資料を通り一遍に読むか、自分の地域の実態に置き換えて提示するかは、それぞれの学校が直面する課題である。委員会がそこまで行うことはできないし、行うべきではない。しかし、この資料が学校にとって少しでも役に立つようにするには、我々が１年間議論してきたことを形として示す必要がある。それを外部に示さなければ、この委員会そのものがブラックボックスになってしまう。

ここでは、様々なことが議論され、共有されてきた。それに基づき、課題や実態を踏まえて、次のステップに進むためにどうすればよいかを話し合ってきた。これらを踏まえ、ぜひこれをたたき台として、基本的にこれをベースに資料がどうあるべきか考えてほしい。次のステップは次の段階で考えるにしても、これをベースに材料となるものを作成していただきたい。

■事務局

貴重なご意見に感謝申し上げる。いただいた意見をもとに、今後資料は全く異なるものになると思う。村上委員の意見にあったような１枚ペーパーで伝わる内容、庭田委員がおっしゃったように、グラフのエビデンスを取り入れ、箇条書きの補完する言葉を入れるイメージを持っている。さらに、市内にはどのような授業があり、どのような授業を目指すべきか、次年度に向けたポイントを伝えるメッセージを含めたいと考えている。塚田委員がおっしゃったように、学校として来年度に向けた目標を端的に伝える内容も必要と考えている。イメージは固まった。

■委員長

事務局のイメージは固まってきたようである。他に、このことについて意見はあるか。

■髙橋委員

今の事務局の発言で確認したいことがある。資料を配布する時期について、どのようにイメージしているのか。次年度どのような授業を作りたいかを考えるという話なので、３月をイメージしているのかと思ったが、３月は学校にとって慌ただしい時期であり、もちろん次年度の見通しを持つものの、現状のものを整理するだけで手一杯な時期である。異動する人は次の学校のことを考えている。そのような状況で配るのは効果的ではないと考える。例えば、４月の最初の学習の時間や研究の時間、職員会議での配布が考えられる。どのような場で配布し、共有する時間を確保することもセットで学校に資料を送付したほうがよい。単に３月に配布するとなると、年度末の資料整理の中に埋もれてしまうことも考えられる。いつ、どのように配るのか、そしてそれが効果的になるように、時間の確保をどのように行うかをセットにすることが望ましいと感じた。

■事務局

昨年度の学力向上推進委員会でも、年度末に資料を作成し、学校に送付している。その当時の委員からは、３月中に資料を配布して、４月のスタートにこの資料を基に授業づくりを進めたいという要望があった。当時の委員は、最初

の研究推進委員会でこういった資料をもとに研究のポイントを立ち上げたいので、３月中に欲しいとおっしゃっていた。もちろん、今回も、ただ配布して終わりにするつもりはない。配布のタイミングや配布方法についての例を通知し、学校長に使い方を任せる形にしたいと考えている。４月も多くのメールが学校から送られる時期なので、そこで資料が埋もれてしまうかもしれないという懸念もある。最適な配布時期を検討しつつ、通知文には３月中や４月に送付する際の活用例をしっかりと含めたいと考えている。

■新田委員

資料作成が間に合うのであれば、校長会に先に行って説明するのはどうか。しかし、次回が３月３日なので、間に合わないのであれば、教頭会に伝えにいくことも考えられる。

■事務局

参考にさせていただき、間に合わない場合は４月の校長会などでの周知を検討する。

■新田委員

教員の動きを考えると、４月には授業や研究のことにはあまり意識が向かないかもしれない。確かに４月の初めは大事な時期だが、小学校では学級経営、中学校では学年経営について考えることが多く、校務分掌はすでに今の段階で準備を始めている。４月の初めは、授業や校内研究のことに頭が向いていない。多くの学校が５月や４月の終わりから５月の初めに研究推進会を開催していると思うので、そのぐらいの時期に周知されれば良いと考えている。

また、この資料は読んで理解するためのものだが、見てわかる資料にした方が良いと感じる。例えば、３ページの「推進プランの目標２では、粘り強く学ぶ力を育成する」という文章は不要かもしれない。視覚的にわかるようにすることが大事だ。文科省の概要は図だけでは難しくて理解しにくいこともあるが、見てわかるように工夫していただきたい。

村上委員がおっしゃるように、グラフの下に授業の中で見られた成果を書い

て、何が対応しているのかがわかるようにすると良いと思う。これによりさらに見て分かりやすくなる。

■委員長

教頭の立場としては、これまでの意見について、どのように考えるか。

■庭田委員

教頭の立場としては、私も文科省や委員会から送られてくる文書に対処しているが、私の学校は幼小中高と４つに分かれており、みんなが集まって話をする機会がない。そのため、「周知をお願いします」と頼まれた内容については、私がどのような内容を周知するかを読み取って、資料の何ページに該当するかを添え、メールで全員に転送している。資料を配布する時には、引っかかりやすい言葉で資料の内容を伝えるようにしている。

新田委員がおっしゃったように、読んで分かる資料ではなく見て分かる資料にするのは重要だが、それだけで「見てください」と言っても見てもらえないことが多い。教頭の立場から言うと、教頭が話すよりも、学力向上担当者が自分の言葉で職員に説明する方が効果的だと思う。新年度の学力向上担当者会が４月に予定されていると思うので、教育委員会からこの資料を「先生たちが自分の言葉で学校に戻って話してください」と依頼してほしい。教育委員会からも、この資料の意図を説明していただきたいが、それを持ち帰って自分の言葉で伝えてほしいと依頼することが大切。校長会や教頭会で「教育委員会からこういう資料を配布します。学力向上担当者に説明してもらうようにお願いしています」と事前に調整してもらえると、スムーズに進むと思う。

■委員長

活発な議論に感謝申し上げる。それでは、事務局の方で大体のイメージができたということなので、配布するタイミングやその場、使い方をセットにするという意見を踏まえて対応をお願いしたい。では、もう１つの家庭学習啓発リーフレットの協議に移りたい。今の議論を考えると、やはり文字が多く感じるが、いかがか。

■石井委員

この資料を作るのはすごく考えなければならず、大変だと思う。私も日々、いろんな資料を作成しているので、どうやったら伝わるか、どうやったらわかりやすいかを考えている。先日、横須賀市ＰＴＡ協議会で今後の事業を考える会があった。今、Canva というソフトがあり、そのソフトは１億ぐらいのテンプレートがある。また、横須賀には Canvasador という公式クリエーターがいる。彼女は保護者でもあり、その方と打ち合わせをした際に、市役所や教育の教員向けの無料プラン、教員用の Canva プランがあるという話があった。このプランでは、さまざまなテンプレートでお便りやパワーポイント、動画を簡単に無料で作成できる。他の市でも取り入れられているので、こういうソフトを使うことが考えられる。

なぜ、このような話をしたかというと、小・中学校のＰＴＡでは、役員のなり手が少なく、広報紙を廃止しているところがあるからだ。広報紙を廃止する理由は、作る人がいない、作れないからだ。テンプレートを使えば、多くのものが作りやすく、それが誰にでも同じようにできるわけではないが、広報誌は作りやすくはなり、取り入れていくべきだと思っている。

作成していただいた資料を見ると、文字だけではなく、図やイラストを取り入れるべきだと思う。家庭向けの資料はカラフルで、かわいいイラストやポップな感じにすることで、見てもらいやすくなるのではないかと思う。その Canva のクリエーターの人とお会いしたときに、無料講師のような形で学校に行って、教員に向けてどのように作るのかを教えることができるという話があった。そうすることで、各教員が作っている学年だよりのようなものも簡単に作れる。そういったソフトの良し悪しは別としても、そういったものを取り入れるのは１つのアイデアになるだろう。

■委員長

先ほどの議論にもあったように、いかに見てもらえるかということが大事で、読むというよりは見るという資料にすることが重要である。例えば、このような資料が冷蔵庫に貼ってあって、いつも目にしてもらえるかどうかということである。学校からのお便りをきちんと整理する家庭もあれば、なかなかそ

こまで手が回らない家庭もある。しかし、これはちょっと貼っておこうと思ってもらえる資料にすることで、何かしらの行動に移してもらえる。そうすれば、作った意味もある。

■村上委員

前回の協議会で、「早寝早起き朝ごはん」を家庭にお願いすることは、難しい家庭もあるという意見を言った。今日、この資料を見たときに、個人的には安心して眺めてもらえると思った。具体的な声かけの内容がわかりやすい。この資料を直すかどうかという議論とは少しずれるかもしれないが、先ほどの新田委員の「憧れの授業」や「どのような授業をしたいか」という話は、この学力向上推進プランの考え方と繋がっているのではないかと思っている。

子どもには、自分がこうなりたいという姿やそれを実現する手段として、自主学習や宿題があって欲しいと思っている。一方で、教員も学力向上推進プランに書かれていることを自分事として「やってみたい授業」として捉えないと、授業改善につながらない。子どもを主体的に動かしたい授業と、この考えは実は似ている。どちらも共通のポイントは「なりたい姿」や「憧れ」が必要だと思った。

今、私は６年生の担任をしているが、「将来の夢」というテーマで学校文集に取りかかっている。その時に、吉田松陰の言葉を紹介した。「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に努力なし、努力なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし」という話を文集作成の国語の授業の導入で行った。子どもたちは文集を書き終わった後、自分でおぼろげだったものがはっきりしてきたようで、次々と自主学習で自分の興味を調べたり、「僕も漢字を頑張らなきゃ」と言いながら動き出したりする姿が見られた。やはり、憧れの姿は起点として大切だと感じた。

この資料でそれを直接伝えるかは別としても、そういった考えが伝えられたらよいと思った。

■髙橋委員

この前の議論を早速生かして、このように資料作成に挑んでいることに感激している。この前の委員会の話では、今年度中は無理だろうとの話だったが、それを何とかしようとしていることに非常に感謝し、感動している。

しかしながら、我々、委員の中には既に前回議論した家庭学習の概念がある。村上委員もおっしゃっていたように、本来、宿題や自主学習などの家庭学習は「自分がなりたい姿」や「本当に学びたい」という思いがあって、それを実現するためのものである。この確認が我々委員の中ではできている。しかし、各教員が本当にそこまで確認して宿題を出しているかはまだ未着手だと思う。もちろん、既にそういう意識で取り組んでいる方も多くいるが、「家庭学習は習慣づけのため」「読み書き計算、音読をとにかくやる」という教員もいるのではないかと思う。子どもたちが目指している姿や今の学びがどうつながるかまで考えていないのではないか。

そうなったとき、まだ教員の意識が高まっていない状態で、保護者に今の学びや家庭学習の考え方の資料を出していくのは少し難しいと感じる。しっかりと教員にアプローチができた上で、このような資料を配布する、もしくはこれを配ることをきっかけに、先ほどの議論のような見直しがどこか行われた上で配るとなれば効果的だと思う。しかし、現在の教員の実態に合っているのかと考え、宿題やその考え方を見直さずにこれを配布してうまくいくのかが、少し心配だと感じた。

特にこの裏面の「宿題や自主学習は何のためにあるのか」という部分は、保護者向けのプリントになっているが、この質問は、まず教員に聞いてみたいと思った。教師が答えられないのに、保護者にどうやって説明するのかと考える。そのため、もう一度、学校で学んでいるものと家庭学習がつながるものだと、本当に目指しているのかを確認することが重要である。宿題の出し方や評価もセットで考えていくべきだ。ただ自主学習ノートに書き込むだけでは、その目的とは違う。目的とセットにすることが大事だと思うので、そこをきちんと整理してから進める体制が大切だと感じる。

■事務局

実は先ほどまで議論していた資料も、もともとのプロトタイプは「これから

の授業・これからの家庭学習」というタイトルで作っていた。それとセットでこの資料を見ていただくことで、髙橋委員の発言にあったように、教師や家庭の家庭学習に対する考えを変えていくことを考えていた。しかし、そのプロトタイプが廃案になり、シンプルな形で作成し直すことになった。改めて作り直す資料にどこまで盛り込めるかわからないが、各教員の家庭学習への考え方を揺さぶるような投げかけもしていきたいと思っている。

家庭学習を題材にしようとしたのは、今年度４月の学力向上担当者会で、グループ協議をしていたとき、多くのグループで家庭学習を中心に議論していた。ある学校の担当者が「うちの学校では『家庭学習のすすめ』や『自主学習のすすめ』というリーフレットを作って子どもや保護者に渡している」と話していた。そのリーフレットを見せてもらい、これからの家庭学習はこうあるべきという資料を作成した。こうしたことは、どこかの機会に伝えていかなければならないと思う。

教員の家庭学習への意識改革がセットになっていないように見えたのは、そういった資料作成の修正があった経緯があるからである。

■委員長

これについては前回の協議でも確認したが、家庭学習は学校でできないことを家庭にお願いするという発想ではない。家庭でどのようにしてほしいのか、家庭の役割というか、家庭学習が結局、読み書き計算のようなものとして伝えていくのか、それとも子どもたちの学びのあり方について注意喚起し、共通に取り組んでもらうのか。何を伝えたいのかによって、出し方が違うだろう。

学校と家庭が同じ歩調を取るのは理想的であり、そうあってほしいが、なかなか難しい。同じように進むのが理想的だが、それができないとしても、どこまで家庭で対応してもらえると、学校での子どもたちの生活や学びが充実するのかを考える必要がある。これは横須賀市の課題にも関わるだろう。

世の中の動きと少し逆行している内容であっても、横須賀にとって必要であれば、それは意味があると思う。そこに込めた思いを伝えていかないといけない。

■塚田委員

前回は欠席だったので、意見が重複するかもしれないが、この資料を見て良いと思ったのは、一番上に「なるほどね」「そう考えたんだね」「ここまで頑張ったんだね」といった保護者の声掛けのモデルが書いてある点だ。それから右下にある「お家での学びを支える環境づくり」の部分に家庭の取組例が記されているのも良いと思う。特にインターネットのスクリーンタイムの問題は横須賀では非常に大きいと思うので、これが家庭の役割だというメッセージを伝えることは重要だ。

もちろん、家庭学習や自主学習の在り方について、さらに踏み込む必要があることは十分に理解している。しかし、自分の学校のことを考えると、その前段階として必要なことが保護者へのメッセージとして前面に出ると、保護者も受け取りやすいと思う。髙橋委員もおっしゃっていたが、自主学習やこれからの家庭学習の方向性については、これからの課題だと私も強く思う。それがない中で、「自主学習は何のためにあるのか」という答えがここに書いてあるが、それ以前の部分を学校の中で浸透させることが前提だと思う。

■委員長

今の塚田委員の発言は、土台として横須賀市が家庭に示していく部分は、最も基本的なことでよいのではないかということだろう。それぞれの学校の状況によっては、その内容からさらに一歩進む学校もあるかもしれない。学校独自で実態に応じて、ベースとして示したことを基にしながら家庭に働きかけていくことは、どんどん行ってほしい。ただ、基本として何を示すのかという点を塚田委員にご指摘いただいたと思う。

この資料は、事務局の黒澤指導主事が作成しているということでよろしいか。

■事務局

その通りである。前回の会議を受けて、実は髙橋委員と同じことを感じていて、家庭学習の考え方は保護者向けではなく、まずは教員に向けてメッセージを送らなければならないと感じ、悩んでいた。昨日、委員長とヒアリングをし

て、内容を変更した。私の思いとしては、先ほどの議論にあった言葉を借りると、表面は見てわかるように、裏面は読んで理解するという両面で作成している。裏面は正直、保護者の心に響かない部分があっても仕方ないが、少しでも心に響くところがあれば、保護者に少しでも安心してもらえるのではないかと思う。

さらに、これを出すことによって、教員にもメッセージにならないかと考えた。配る前に、教員に読んでもらいたいと考えていて、今そのように作っている。更新できるよう、ご意見をいただきたい。

■庭田委員

前回のものと大きく変わっていて、すごいというのが一番の印象だ。当日に配布されたヒアリング後の資料ではなく、事前に送っていただいた資料が、教員としてはとても読みやすい。だから、こちらをベースに教員向けの資料を作っても良いのではないかと考える。文言が保護者向けになっているが、少し言葉を変えれば、教員向けとしてもそのまま使えるのではないかという感覚がある。

当日配布の保護者向けの資料についてアイデアがある。私も学級通信や懇談会資料をこれまで作成してきた。委員長が冷蔵庫に貼るといった話をしたとき、自分が以前数回やったことがあるのだが、Ｑ＆Ａ形式にした資料を思い出した。例えば、「勉強している子どもにどう声をかけたらいいですか」といった質問に「なるほどね、考えたね、頑張ったね」といった答え方の例示があり、その下に少し解説が書いてあるような作りだ。２つ目の質問は、「子どもから『何のためにやっているの？』と聞かれたらどうしたらいい」とし、それに対する答えと簡単な解説を記載するようなものだ。このようにすれば、資料を冷蔵庫に貼ってもらえるかもしれない。ただし、そこまで具体的にする必要があるのかどうかも考える。そこまでハウツー的にするべきかどうか、少し悩んでいる。

■委員長

先ほどから教員の意識を変える必要があるとおっしゃっていた。例えば両面

で作ると事務局が言っていたので、表は家庭用にし、裏面は家庭向けでありながらも、先生たちにはこういうふうに発信していますと示し、両方を共有する。つまり、それが実は教員へのメッセージで、教員に示したいことを裏面で共有するのである。全てをそのような方向でまとめる。複数枚になると、読んでもらえないこともあるので、そういうやり方も良いかと思う。

■新田委員

　もしこうしたものを作ったらどうかと思ったとき、生成ＡＩを試してみると良いかもしれない。意外なアイデアが生まれるので、生成ＡＩを活用しない手はないと思う。ですが、この資料ですごく良いと思うのは、「家での学びも学校での学びも、子どもが伸びる秘密がある」という部分だ。家庭の学びと学校の学びともに、子どもへの言葉がけに秘密があるということがわかれば良い。上には何かデータを入れ、どのような言葉がけをするのかを真ん中に配置する。そして、「家庭学習は何のためにあるの」という質問も入れる。実はこれには答えが入っていない。何のためにあるのかを親子で考えることで、質問を投げかける部分がとても良い。これらにキャッチコピーをつけて合体させると繋がりができる。 それはまさに委員長がおっしゃっていた、横須賀の課題として、家が安心して落ち着いて過ごせる環境ではない、言葉があまり交わされず、スマートフォンを長時間見るということが問題になっていることを考えると、それが繋がる構成にすると良いだろう。あと、キャッチーな言葉で引きつける方法として、例えば「子どもが伸びる秘密」という言葉にして、そこにＱＲコードを貼り、それを読み取るとその秘密が見えるとか、教育委員会の指導主事が話している動画を見ることができる、そんな動きがあると良いと思う。

■石井委員

　この資料は、地域には配られているのか。

■事務局

　学校だけに配布している。

■石井委員

その地域の方が見て問題ないのであれば、地域に配布しても良いのではないか。例えば地域の子供会や、「愛らんどよこすか」のような子育て施設とか、いろんなところで見る機会があればよい。そういうものは難しいものなのか。家庭配布が前提なのか。

■事務局

その通りである。予算的な理由で枚数に限りがある。予備は一応お渡ししているので、学校の裁量に任せられている。

■石井委員

家庭に配布されるプリントは多く、我が子もたくさん持って帰る。そうすると、どさっと置いてあって、私もなんとか目を通そうとするが大変に思う。全ての家庭に配布することが前提であることも理解できる。しかし、町内の方たちとも問題意識を共有するのは難しいかもしれないが、近くの学校がこういうことに取り組んでいるということを地域の人たちに知ってもらえるのは良い。そうすれば、うちの孫や学校が今どういう考え方をしているかについて理解する地域の人が増えるだろう。そこから対話が増え、地域の人たちが「ちゃんと勉強しろよ」と声をかけてくれるようになるかもしれない。

こういった取組は、保護者だけでなく、地域の人たちの方がよく見てくれる可能性もある。学校からの案内が回覧板に付くことも多いので、そういうものを見ていると思う。もしそのような場所で配れれば、町内会に一部ずつでも良いと思う。市役所の人が連合町内会に行ったときに、各連合町内会の会長さんたちに資料を渡し、学校や横須賀市教育委員会が何を考えてやっているかが伝われば、地域の安心や理解にもつながると思う。

印刷の部数が足りないのであれば、ＰＴＡでお手伝いすることもできる。ＰＴＡで提案するものと同じ用紙の裏面に印刷して配ることで、予算的な協力ができる。家庭に配るものを、私たちも家庭に発信し、皆様からお預かりしている予算であり、教員からも預かっている予算でもあるので、家庭への発信は一緒に取り組めると良いと思う。

■委員長

貴重なご意見をいただいた。今後は学校運営協議会を活用することも考えた方が良い。協議会の場では、学校が配布しているものや、発信しているものを見ていただくよう、協力をお願いすることで、学校側が地域や保護者の方に向けての情報発信をすることができる。元のデータは教育委員会からもらえるため、それをうまく活用し、学校のホームページにリンクを張って、いつでも見られるようにすることもできる。また、市ＰＴＡ協議会のホームページにもリンクを張ってもらい、いろんな形で目にとまるような工夫をすることもできるだろう。様々な情報発信は、これからの時代に必須だと思う。先ほどＡＩに聞いてみるという話もあったが、いろいろ試してみることが大切なのではないか。

■事務局

皆さまのおかげで、さまざまなアイデアをいただいた。この資料ができたときには、ＰＤＦデータにしてホームページなどにアップロードできる。また、そのページにリンクするためのＱＲコードを作って、リンクを貼ることができる。ＰＤＦデータなので、学校運営協議会の中で紹介していただくよう市教委から依頼することもできると考えている。まずはこれを完成させて、それをデータ化したいと思う。

■委員長

最近では、さまざまな文書の下にＱＲコードが付いていて、いろいろな形でデータを受け取ることができる。資料に載せきれない情報もデータ化して、うまく取り入れて発信してほしい。ＩＣＴをどう活用するかも、学力向上を推進するためには大変重要な部分だと感じる。全委員から意見をいただけたため、以上で協議を終了する。

令和6年度

第4回 横須賀市
学力向上推進委員会

●令和７年（2025 年）２月 19 日（水）
●横須賀市役所　正庁

【次第】

１　開会

２　教育指導課長あいさつ

３　協議

〈協議事項〉
① 今年度の学力向上に向けた取組のまとめの内容について
② 家庭学習啓発リーフレットの刷新内容について

資料１～２

４　連絡
・次年度の学力向上推進委員会について
・今年度の出席状況の確認（交通費のお支払い）

５　閉会

資料１

R6（2024）

横須賀市学力向上推進プラン実施における
令和6年度までの推進状況等について（報告書）

学力向上推進プラン（以下：推進プラン）の目標を実現させていくためには、全ての教職員と目標を共有し、横須賀市全体で組織的・計画的に学力向上に取り組む必要があります。

本報告書は推進プランに掲げた３つの目標に関連するこれまでの取組の成果と目標指標に関連した数値が上昇した学校の取組をご紹介します。

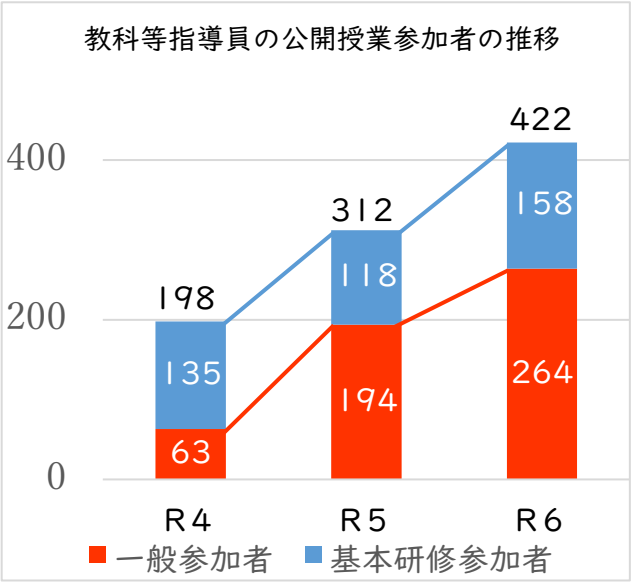
これらを共有することで、本市全体の学力向上の取組をさらに活性化させ、 横須賀の全ての児童生徒に「確かな学力」を育成することを目指します。

ver. 2025.02.19

学力向上推進プランに掲げた3つの目標に関連する取組の成果

推進プランは令和４年から４年間の計画で進めています。このプランで掲げた目標の実現には、教員の授業力向上が不可欠です。教員の授業力を向上させるためには、他の教員の授業を参観し、多くの教員で協議を行い、新たな気づきを促すことが最も効果的であるという提言を、学力向上推進委員会からいただきました。しかし、「コロナ禍により、授業を観る機会が減った」「模範となる良い授業を見たことがない」という声も耳にします。

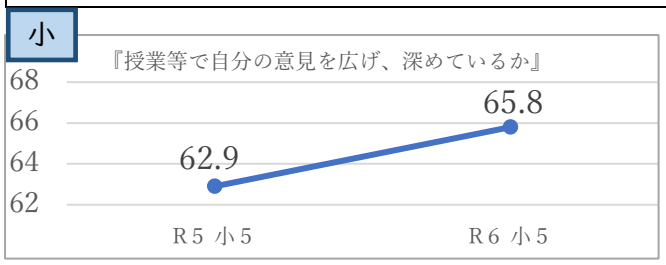
そこで、推進プランの実現に向けて、今年度から教科指導員の人数を増やし、年に一度の授業公開を出張日の水曜日に行うことにしました。右のグラフに示されている通り、教科指導員の公開授業の参加者は年々増加しています。これは、教員の授業改善に対する意識の高まりが、学力向上につながっていると捉えることができます。

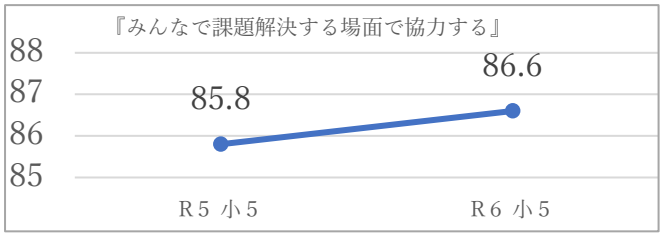


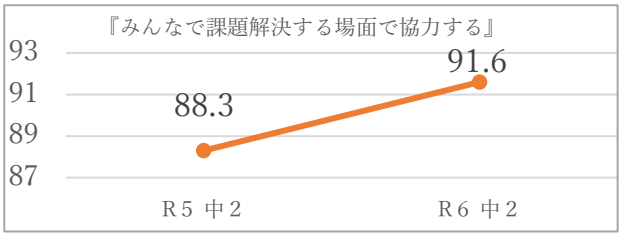
目標　1　　学び合う集団の育成を図る

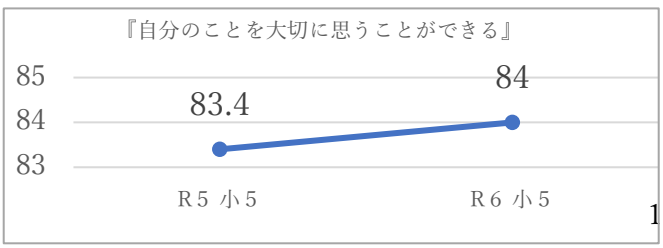
◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

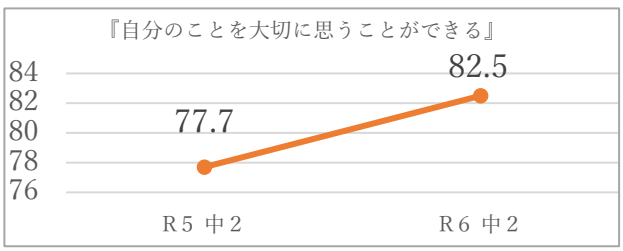
「授業等の話し合い活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」
「みんなで課題を解決する場面で協力しようとしているか」
「授業等で自分の意思を広げ、深めているか」の肯定回答率の変化











目標　1　学び合う集団の育成を図る

推進プランの目標 1 では、「学びあう集団の育成を図る」ことを掲げています。その実現状況を見取る指標は、「授業などの話し合い活動で、自分の考えを広げたり深めたりできているか」を含む 3 つの質問の肯定回答の割合です。令和 5 年から令和 6 年にかけて、その割合はわずかですが、どの項目においても上昇しています。

また、下のグラフは全国学力・学習状況調査において、「学び合う集団の育成」に関連する質問に対する本市の児童生徒の回答割合の変遷を示しています。令和元年度から今年度まで、小学校でも中学校でも肯定的な回答の割合は年々増加しています。授業の中で自分の考えが広がったり深まったりしていると実感している児童生徒の割合が年々増えているということは、各学校において、児童生徒が考えを広げたり、深めたりできたと実感できる授業が増えてきたことを意味します。この結果は、市全体での授業改善の成果であると言えます。

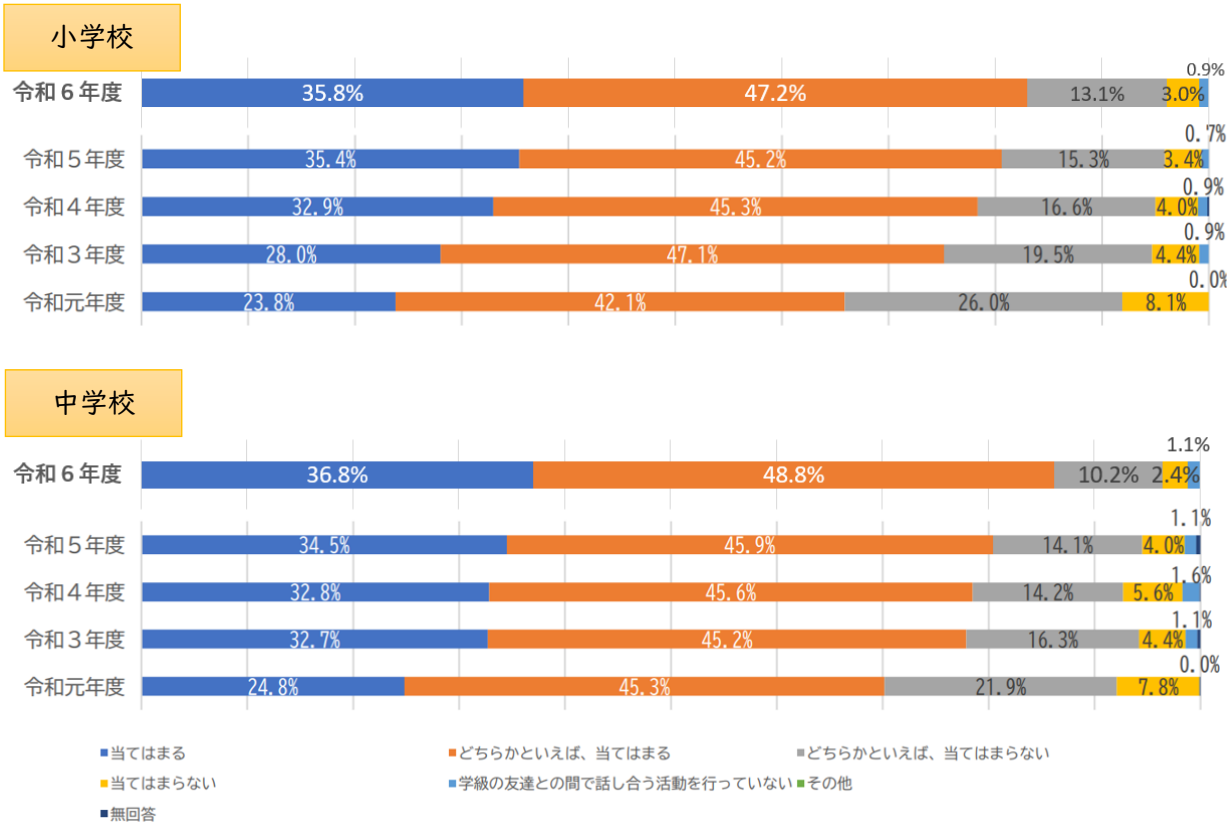
さらに、この目標指標に関連した数値が上昇した学校の授業を分析すると、どの授業においても、「児童生徒の発言を肯定的に受け止める」「しっかり最後まで児童生徒の話を聴く」といった教師の指導が見られました。たとえば、「なるほど」「そうなんだね」「たしかに」といった言葉で、教師が率先して児童生徒の言動を肯定的に受け止め、共に考えるモデルとなることで、学級全体において真剣に考えたり、互いの意見を共感したりするような雰囲気が醸成されていました。

全国学力・学習状況調査　質問紙調査（小学校・中学校共に質問 33）

学級の友達（中学校の質問では『生徒』）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか

※令和元年度～令和５年度の質問は「～（前略）～を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」

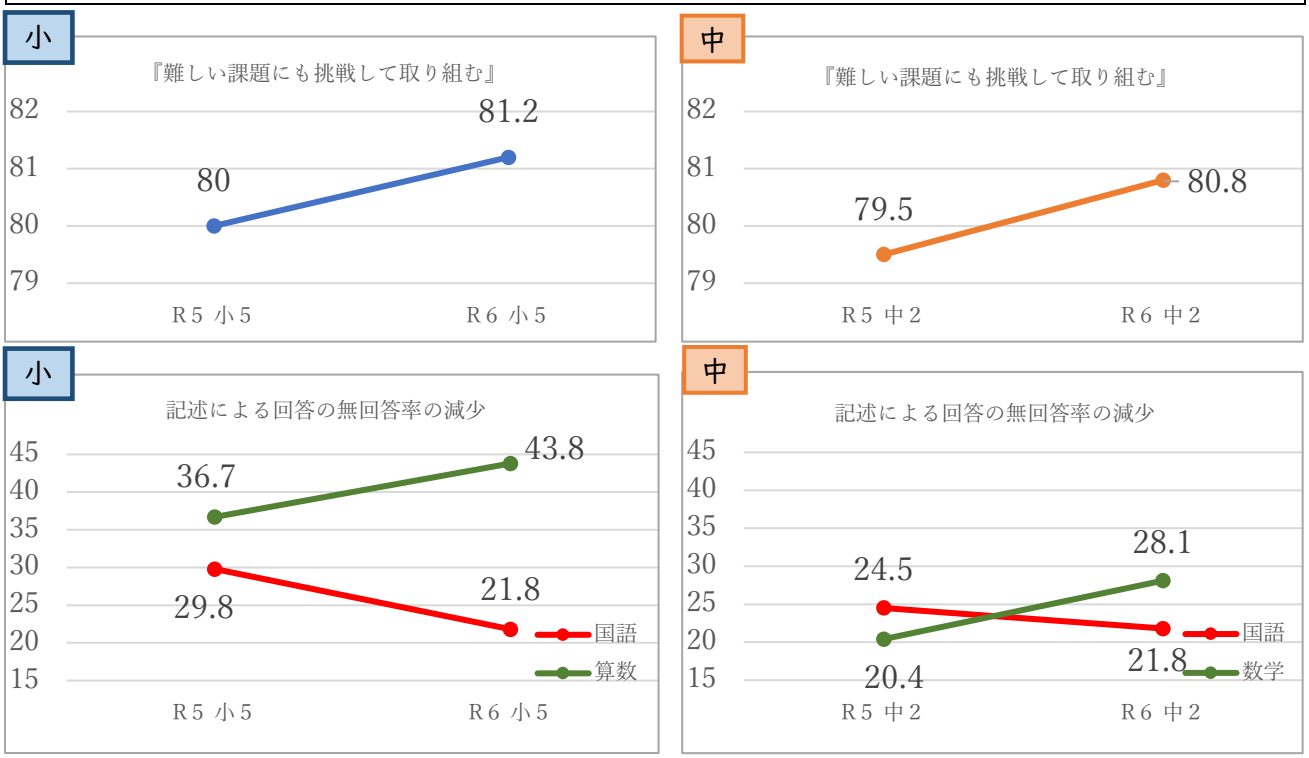
また、質問番号は年度により異なっている。



目標 2　粘り強く学ぶ力の育成を図る

◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」の肯定回答率の変化
記述による回答の無回答率の減少の割合の変化



推進プランの目標 2 では、「粘り強く学ぶ力の育成を図る」ことを掲げています。その実現状況を見取る指標としては、「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」という質問の肯定回答の割合と、記述による解答の無回答率の減少の割合です。令和 5 年から令和 6 年にかけて、「難しい課題に取り組む」という意識調査の肯定的な回答は、わずかながら上昇しています。また、小中学校共に、国語の無回答率が減少しました。

長年、本市では、国語の「書くこと」に課題があり、各校が指導に力を入れてきました。今年度、その無回答率が大きく減少したとともに、下の表にあるように、その正答率も上昇しています。

小国語 記述正答率 R５	R６
42.8	63.9

中国語 記述正答率 R５	R６
46.1	49.6

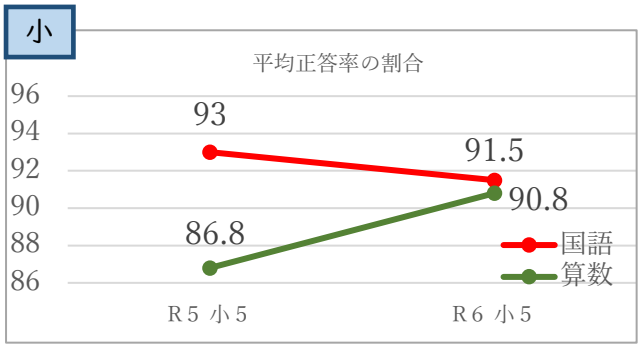
「難しい課題にも挑戦する」の肯定回答の割合が上昇した学校の授業を分析すると、単元や授業の初めに、何を学びたいのかという目標を明確にし、教師が児童生徒とその目標を共有し、単元の途中でその達成状況を振り返ったり、課題を繰り返し挑戦したりする機会を提供する単元計画がたてられていました。

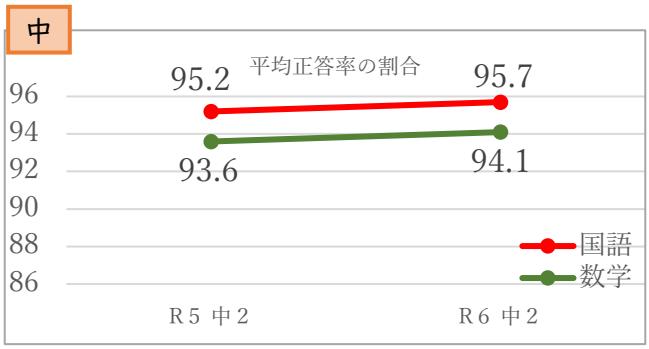
さらに、国語の無回答率が大きく減少した学校の取組を分析すると、学校研究で自らの考えを表現することをテーマに掲げ、国語という教科に限らず、どの授業でも日常的に自分の考えを書いて表現することを職員全員が意識し、学校全体で指導に取り組んでいました。

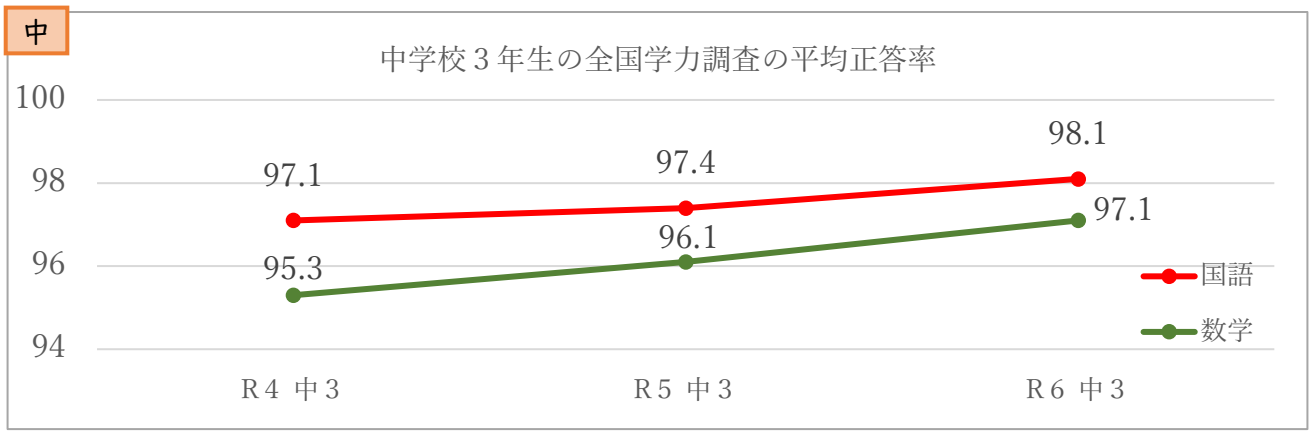
目標 3　学力層全体の引き上げを図る

◆同一集団の経年変化の上昇

横須賀市立小・中学校学習状況調査の平均正答率の割合の変化
全国学力・学習状況調査の平均正答率の変化







推進プランの目標３では、「学力層全体の引き上げを図る」ことを掲げています。横須賀市立小・中学校学習状況調査において、小学５年生と中学２年生の調査結果を見ると、小学校の国語における平均正答率は減少しましたが、その他の教科では大小はあるものの平均正答率が上昇しています。また、中学校３年生の全国学力・学習状況調査においては、全国の平均正答率を 100 とした時の本市の正答率の割合は上のグラフにある通り、国語・数学ともに年々上昇を続けています。

これらの学校で平均正答率が上昇している要因を分析すると、目標 1 の分析にあったように、児童生徒を肯定的に受け止める授業が、学年や教科に関わらず行われていることがわかりました。また、目標２の分析により明らかになったように、学校全体で授業改善を推進する学校研究を中心とした学校運営が行われていることも共通点です。どの学校も学力調査の結果を上げるために特別なことを行うのではなく、普段の授業を充実させることや、児童生徒と教師が良好な関係を築くことを重視していました。

今年度の各種調査結果の分析や学力向上担当者会、学力向上推進委員会の取り組みを通じて、先生方の参考になる内容を抜粋してお伝えしました。先生方が日々教材研究に励み、校内研究への積極的な参加を通して自己研鑽を積み重ねて『授業改善』を行ってきた成果が、まさに今、表れてきています。今後も学力向上を目指して校内で議論を重ね、そこで得た気づきを共有し、日々の授業改善につなげていってください。

学校での学びと家庭での学び

絵を考えてみます

横須賀市教育委員会では…というメッセージをこの辺りに読んでもらえるかもらえないか程度に入れてみてはどうでしょうか？

●

●

関連二次元コード

横須賀市教育委員会

宿題／自主学習は、何のためにあるの？

学校によっては、宿題／自主学習が当たり前のように出されているかもしれません。その時に注意したいのは、宿題／自主学習を「完成させること」が目的になってしまっていないかどうかということです。「この家庭学習は何のために取り組んでいるのか」というその目的を学校から受け取り、お子さんとも共有してみてください。なかなか取り組もうとしないときには、言葉かけを「宿題やったの？」から「今日は、どんなことをするの？」に変えてみるのはいかがでしょうか。

おうちでの「まなび」を共感したり、励ましたりすることで…

保護者の方がいつも家庭学習に取り組んでいるお子さんのそばにいることは難しいかもしれません。そのため、できあがったものを目にすることが多いと思いますが、その際には、「なるほどね」「～と考えたんだね」などとその取組について共感したり、未完成であっても「ここまでできたんだね」とそのがんばりを励ましたりしてください。お子さんに寄り添うことや励ましの言葉は、すべてのお子さんに必要です。共感的な言葉は、お子さんの意識を前向きにさせるでしょう。

宿題／自主学習によって苦手意識などを生み出していないか。

本来、学習習慣の定着や自ら学ぼうとする姿勢を育むことなどを目的に取り組んでいるはずの宿題や自主学習によって、逆に学びに対するネガティブな印象につながってしまうことがあります。「家庭学習で力を付けさせる！」という意識が強すぎると逆効果になることがありますので、家庭学習を学校でお子さんがどのようなことに取り組んでいるのかを知るためのものなどと捉え、量や内容が過度なものになっていないか取組状況を共感的に見てあげてください。

おうちでの「まなび」を支える環境や時間はどのように整える？

学校と違い、おうちにはたくさんの魅力的なものがあります。おうちで取り組んでいる際に集中できないときには、次のことを参考に声をかけてみてください。

・インターネットやスマホ、ゲームなどの時間は、親子で決めておく。
・机の上やまわりを整理整頓することの気持ちよさを味わえるようにする。
・子どもが、取り組んでいる間は、テレビなどを消すなどして集中できる環境にする。